

# ぶどうの木

## — 第 2 号 —

目	次
巻 頭 言	覆 本 牧 師
夏 期 学 校 雑 感	島 崎 美 知 子 (1)
朝 ご と に	調 疼 子 (3)
主 共 に ま せ ば	ベ タ ン ヤ の マ リ ヤ (5)
疾 寺 聖 書 教 会 と 私	加 藤 干 代 (6)
信 す る	岡 嶋 ミヨ子 (15)
短 歌	正 野 巖 雄 子 (16)
生 活 雑 話	加 藤 み さ 辰 (17)
御 導 の 中 で	丸 山 恵 美 子 (21)
勝 利 の 道	岡 嶋 ミヨ子 (21)
ゆ る し	正 野 員 子 (23)
詩 「スリッパさん」	正 野 員 子 (30)
思 へ な れ じ も	伊 規 野 泰 子 (31)
料 理 雑 感	伊 規 野 泰 子 (33)
求 道 者 へ の 書 簡	高 木 敏 夫 (34)

八幡前田教会

わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふけるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髓とあぶらとをもつてもてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びのくちびるをもつてあなたをほめたたえる。

(詩 六三ノ五一六)

主が私共に与えて下さったおめぐみは測り知る事が出来ません。日毎その豊かなめぐみを生活の中で味わせて頂いて居ます。又そのめぐみにより、私共のうちに芽生えた永遠の生命は日毎夜毎成長して参ります。そのためには雨も、ひどりも必要でしょう。

夜のふけるまゝに……：人生の夜、右を見ても、左を見ても望みのない暗黒の中で、誰も居ない孤独な夜の中に在つて、主を深く思うときわたし共の魂は髓とあぶらとをもつてもてなされるように飽き足り、喜びの口びるをもつて主をほめたたえます。

今ここに「ぶどうの木」第二号が出来ました。一人一人の生活の中で、職場で、たゞかいの中で、主を深く思い、喜びの声を以つて主のみ業とみ力をほめたたえる歌声がひゞいて居ります。どうか此の「ぶどうの木」の中の一編一編からその歌声をきき、私共も又主に目を注ぎ、主を深く思い、今の此の所から主をほめたたえて一歩一歩御言葉に堅く立つて明日へ向つて前進して行きましょう。

その歩みの中から次の「ぶどうの木」第三号の香り高い、おいしい実を一つ一つ拾ひ集めて感謝を以つて主に捧げ度いものです。

## 夏期学校雑感

島崎 美知子

幼児を連れて夏期学校に参加させて頂くことも今年で五回。年毎に迫る老を思い今年も果してこの事が許されるであろうかと一抹の不安を拭いきれないものがあつた。

「人の心には多くの計画がある。しかしたゞ主のみ旨だけが堅く立つ」(箴言十九・二十)自分の計画を遂行し度いと祈るのではない。今年も必ず行けるものと信じて日数数えて待つ子等の願をみごころならば叶えさせ給へと祈つて居る中に思うところ願うところいたくまされることを行い給う主は素晴らしい三日間の夏期学校生活をお与え下さつて、今思い起してもたゞ感謝に溢れるばかりである。

太い幹をくねらせて亭々とそびえる松の巨木数万年も前から寄せてはかえして居たのである。海の波にも悠久の神とその偉大な御身のわざを思はしめ、緑の山々の間から光まばゆくさし昇る朝日。遠く水平線のか

なたに雲と波を紅に染めて沈みゆく夕日を眺めては、詩篇十九篇がそのまゝ、爽感となつてこよなく神をあがめ高らかに讃美の声をあげ度いばかりである。神のみ声がこの世の様々な汚れにさまたげられず直接にひしひしと胸に迫り来るような日々だつた。

「はじめに神は天と地を創造された」(創世記)然しいたずらにこれを造られたのではなく、これを人のすまゝとして造り与えられたのであるが故に私共は事々に神に相談して義なる唯一の神に従つて人生行路を歩むべきこと。これが救はれる唯一の道であるとのお話には殊更に感銘を覚えた。又十一日朝の伊規須先生のお話にも深く決意するところがあつた。

ヨハネ福音二十章十九節以下「父がわたしをおつかはしになつたようにわたしもまたあなたをつかはす。」私の如き弱く小さな何事をもなし得ぬ者にも使はされたとするの使命があるのだ。

それぞれの持場立場によつて仕事にかわりはあつても責任の重大さに大小はない。「聖霊を受けよ」と云はれた主のみことばに従いどうかみたまによつて深められ強められ使命を全うさせて頂き度く切に祈る。

老も若きも心を一つにして恵を感謝していたゞく食事  
も又楽しいものゝ一つであつた。労をいとほず御世話  
下さる方々。小さい子供もそれぞれにお皿を運ぶ茶碗  
をならべる。若い人々のもりもりと旺盛な食欲もたの  
もしい限り。神の家の大家族が眼前に展開されて感謝  
たゞ感謝。

心ゆくばかり満されて感謝の終つた日の翌日のこと。  
三日間を宿題の勉強から全く解放されて楽しく過した  
子供の頭にはたまつた日記書きがたまらなく厭のよう  
であつた。

「日記書きなさい。早く書いて置かないと忘れるよ。」  
「もう忘れた。」

「何か覚えてるでしよう。何でもいゝから一つでも書  
いてごらん。」

「何も覚えとらん。」吐き出すようなやけつばちな言  
葉。腹の底から怒りが込み上げてくるのをグツとおさ  
えて、つとめてやさしく

「忘れたところは一緒に考えて上げるから少しづつで  
も書いてごらん。」

「イヤー できません。」 はては例によつて悪口雑言。

泣く。わめく。こちらも心の平静をすっかり失つてし  
まつて、たまらなく憎らしくなる。あゝどうともなれ  
子供の事なんか今後絶対にかまわん。

津屋崎聖愛ホームの安らかな、清らかなたゞずまいが  
臉に浮ぶ。ふとどこからともなく細く小さいみ声が聞  
えて来た。「地の果なるもろもろの人よ。わたしを仰

ぎのぞめ、そうすれば救はれる」(イザヤ書四十五章二  
十二節あゝ、そうでした。主の居たもうことを私はすつ  
かり忘れて居ました。「あなた方の言いつ分を持つてきて  
述べよ。また相談せよ」とねんごろに言つて下さる方  
にソツポを向きたゞ自分のみじめな敗北にしがたげら  
れる様な思いに沈むのみでした。暫くして心をとりに  
おし主の前に悔いて祈つた時、恰度子供が部屋に入つて  
来た。「さつきはごめんね」とすつかり折れて素直な  
調子。思はず喜しさがこみ上げる。

「あなたが忘れて居ても神様が教えて下さるからね。  
お祈りして書いてごらん。」

数時間後「お祈りして書いたらね。三日間のことみん  
な書けたよ。」と晴やかな様子。

この幼い子にも神様が御自身をあらはして下さつたこ  
とに感謝感激の至りであつた。

△朝 毎 日 △

調 悠 子

(I)

出勤の準備はしたものの、どうしてか、気が進まず、  
欠勤して家に、酔まつていたい気持ち一杯。こんな時の  
私には、主の証人としてなど、職場に立つ勇氣は全く  
ない。まるで、手も足も出ない状態なのである。時間  
は、迫ってくる。この忙しい時期に休んではいけない。  
でも一日だけ休養をとりたい。心の中は戦いである。  
なんと、愚かなことか。ようやく、お祈りを始めた。  
なんと、主は、あわれみ豊かな、お方であろう。待  
ちかねていたように、聖旨を与えられたのである。

「主がその席に、着かれた時、わたしのナンドは、  
そのかおりを放つた。」(雅歌一・十二)

その瞬間、私の心は、明るく輝いた。私の死体の悪  
臭も、主の内住により、香ばしいかおりとかえられる  
ことを示された。喜び勇んで家を出た。感謝の一日。

(II)

その日は、保母の検定試験日、前からの念願であつ

たが、受験となると、やはり、恐い。唯、主の御前に  
祈つた。

「御存じのとおり、何の力も知恵もない私です。み心  
でしたら力をお与え下さい。すべてを主のみ手にお委  
ねいたします。御名の崇められる道に進ませて下さい。  
あわれみ下さいましてお約束の聖旨をお与え下さい」  
と。

主は真実で、めぐみ深きお方でございます。祈り終え  
たその時に、聖句カレンダーの中から、み声を発し給  
うではありませんか。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願をおこさせ、  
かつ実現にいたらせるのは神であつて、それは、神の  
よしとされるところだからである」  
(ピリピ二・十三)

主は、この卑しい僕のそば近くにいらして、祈りの声  
を聞いて下さり、答えて下さつたのです。この虫けら  
の如き僕の前に、臨在し給うたのです。私は、おそれ、  
おののきました。「勿論ないことです。主よ。」と  
声にならない声で呼びつゝ、主の愛に感謝し、泣き続  
けました。保母になりたいという願いは、私の欲念か  
ら出たものではないかと、長い間迷つておりました。

しかし、御言の通り主が私に願いを起させて下さり、  
主の業をはじめておられたことをはつきり知りました  
からもはや私の心は定まりました。試験に対する恐れ  
など全く消え失せ、自らの将来について、すべてをお  
委ねしました。試験の前に己に勝利が示されたのです。  
たとえ、今度の試験が失敗に終つても大丈夫。この聖  
言によつて主はきつとこの僕を導き給うのだという確  
信を与えられたのでした。勿論その日の試験は安らか  
に受けることができました。ピアノが普通の時の何分  
の1の力しか発揮出来なかつたことが、受験后残念に  
思われてなりませんでした。その時もみことばにすが  
つて、祈り続けました。

そして二ヶ月後の発表の朝、祈りの時に自分がいか  
に愚かで有るに甲斐なき者であるかを主に示されて、  
すべてを主にお委ねし、主の御栄光のためにのみ、ご  
自由にこのはしためを用いたまえと祈りました。

心から讚美歌二八五番を歌いました。

出勤すると、同僚の方から試験に合格したと知らされ、「なんじらは、求むる所を知らず、  
常に主が弱き僕を真実に導き給うことを身をもつて体  
験させていただけただけことを心から感謝しました。試験  
そのものは、他の人から見れば、易しいものかも知れ

ませんが、専門の学校にも行けなかつた私には、困難  
な道でした。何んの努力もしない愚かな私ですが、主  
によりすがつた時、力と知恵とを与えて下さつたのだ  
と思います。合格という祝福の上にこの受験によつて  
主に直接お目にかゝり、み声を聞き、手ざわることが  
できたという大きな恵みを受けようとは、夢にも思わ  
なかつたことでした。

唯、主と共にある生涯の幸を日毎にかみしめていま  
これから、この保母の資格をとおしてこの私を主は  
いかに導き給うかと今から楽しみに、導きを待つてい  
ます。感謝。

「そこで、彼らは、喜んでイエスを迎えようとした。

すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしている地に着い  
た。」

(ヨハネ六・二一)

(四)

「なんじらは、求むる所を知らず、  
わが飲まんとする酒杯を飲みうるか」

(マタイ二〇・二二)

いつでも、私は、淋しいにつけ、苦しいにつけ、天

国を仰ぎ、そこでの幸福に憧れます。天国に入りたい一心です。

主は、この私に今朝、み傷を示し給いました。私は、主と共にカルバリの丘に向つて十字架を負つて歩いたでしょうか。

主が私の罪のために飲み給うた酒杯を、その苦渋に充ちた酒杯を飲んでいたのでしょうか。良き恵みだけはいたゞこうとしますが、主と共に苦しむことは全くありませんでした。主よ。お許し下さい。これからは、十字架を負つて主に従い致します。その一日は、主の御傷にふれつゝ、静寂な一日をすごすことができて感謝いたしました。

「いさおなき我を、かくまで憐み、イエス 愛し給ひみ許に われゆく」

(讃美歌二七一番)

「主共にませば」

ベタニヤのマリヤ

めに実家に帰ることになりました。その時前田教会のあることを電柱の張紙で知りました。

幼い時バプテスト教会の日曜学校へ行つた事がありました。自分はこのまゝで居るなら近いうちに死んでしまひだろ。死ぬ前に一回でもいゝから清らかな話しを聞いておきたい。そう思つて、出口が一番近い所のベンチの端つこでお話しを聞きました。

その時の私は人様から何か言われても、両手で頭を押え込んでしばらく考えてからしか返事が出来ない有様でした。また主人に葉書を書くのにも一日中机にしがみついてそれでも二、三日はかゝるといつた状態で、一週間ぐらい早天祈禱会に通つてゐる内にスラスラ書けるようになったので、たゞ驚きました。ある日「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言によつて生きるのである。」

(マタイ四・四)という聖言を切に頂戴致しました。私が今日あるのはイエス様が生かして置いて下さるのだと思います。主人が当り前の人だつたらこのイエス様を知らずに過したことでしより。

昔の昔、私はある出来事で脳栓血となり、療養のた

乾く間なく、祈ると知らずや)

讃美歌五一〇番(春は軒の雨、秋は庭の露、母は涙

加藤千代

主人の事を考え歌つていると淋しくなる事もあります  
が、私には生きたイエス様がいらつしやるから大丈夫  
私に生きることをお許しになつたお父様、お正月に食  
べる物もなくなつた時にも食物を賜わり、悪い足の生  
瓜をはがしてブドー状球菌ではれ上つた時も癒して下  
さつた。一つ一つ恵みを教えている内に希望が湧いて  
来る。

「主よ、力ある者を助けることも、力のない者を助  
ける事も、あなたにおいて異なることはありません。我々  
々の主よ。我々をお救い下さい」(歴代下一四・十)  
と榎本先生の祈りの冒と共に助けられて来ました。

先生が毎週お話になる御話をたゞアーマンと受入れ  
ております。五つのパンと二匹の魚でもつて五千人の  
人を養われた事も知っています。

「たとい私は死の陰の谷を歩むとも、わざわざいを恐  
れません。あなたが私と共におられるからです。あな  
たのむちとあなたの杖は私を慰めます」(詩二三・四)

この聖言は私に大きな力となり励ましとなります。  
私の生活が変る度にこゝを聞いて自分に言い聞かせて  
おります。

昭和三十五年一月元旦。私共夫婦は一誕生間近い長  
男をかかえて聞えて来る讃美歌をたよりに息せき切つ  
て教会にとびこみました。大分探したので遅くなつた  
のです。やつと間にあつたと主人と顔を見合せました。

がそれは最後の讃美で礼拝は今終つたところでした。  
けれどもそれは前田教会でいつも讃美していたなつか  
しい歌で心もとけて行く様に喜しく前田教会に帰つた  
様ななつかしみを覚ええました。大勢の信者さん達が夫  
々賑かに語り合いながら出ていらつしやいました。「あ  
あ、あなた、その為に祈らなきや。祈りましよりね」  
と手をふり励ましていらつしやる姉妹が居られます。  
「やつて居られるな」と私の顔は自然ほころび、こ  
ゝこそ、私の居るところであると、自分の家に帰つた  
様なやすらぎを覚ええました。

これが私共がこの浜寺聖書教会に導き入れていたま  
だ最初の日のごさいました。

次の御聖日子供達は日曜学校、私共は母と共に病床に



在る父を除いて全員礼拝出席させていたゞきました。メッセーじも此度はごく自然に心に入つて参ります。と言いますのは、前年の暮来擧致しまして以来あちこち教会を探して居り、私はこの教会の前にも一つ別の教会を訪れて居ました。その時牧師先生の語られるメッセーじはみな頭の上を通りすぎて行つてしまふ様でどう捕えようと思つても心に入つて参りません。私がどうかやつているのだらうかと思つたものでしたが、此教会ではそうでなくよく分りましたので、いよいよこゝこそ主が導いて与えて下さつたところと感謝の心に心定めました。その次の礼拝の終り頃に「初めて此の教会においでになつた方は一寸お立になつて下さいませんか」と司会者の方が言われましたが、私共はもう三回目であるし、と主人と顔を見合せ立上ることをやめました。

づ主人が出て行きました。仕方なく私も長男を抱いたまゝ出て行きました。三人、いや四人ずらりと並んで改めて母が、これが息子でこれがその嫁でと紹介してくれました。私共は揃つて頭を下げました。満場われる様な拍手と笑いで一杯。こうして私共は此の教会の交りに入つて行かしていたゞいた訳ですが、礼拝が終ると突に皆忙しそうに打合せやら、夫々のグループに、お部屋に消えて行つてしまわれ、私共に声をかけて下さるお方はなく、少し心淋しい思いを致しました。ふと見ると小さなお部屋のガラス越しに一斉に頭を垂れて祈つておられる一群の方々。ハツと襟を正す様な思いをし、あゝやはり素晴らしい教会だと心をかえて、いそいそと家路をたどつた事があり、その様なことが度々でした。

間もなく父が亡くなり、そのお葬式に今考えますとあの方もこの方もいらして下さつた。その当時の牧師先生、岩佐先生も榎本先生と一緒に式の事に當つて下さつたと教会側の御親切を思うのですが、その当時は夢中で何も解らずだんだん皆さんの無関心と思える態度が辛くなりました。そうではない私は唯主を見上げ主を礼拝する為に教会に行けばいいのだと自分に言い

聞かせても、淋しさに変りはなく、メッセージでも何か力が欠けているようであるし長男もだんだん赤ん坊でなくなり、今日はもう止めようかという日も出て来るようになった、一体これが主が与えて下さった教会だろるか、もつと他にあるのではないかと、心がうろろする様になつて来ました。

今考えますと、その当時この教会にはまだ定まつた牧師がおられず、宣教師の方が一年帰国しておられる留守を随分遠い所から(約一時間半程かゝる所でしよう)通つて岩佐牧師は来ておられたのでした。それでメッセージが終ると大急ぎで帰つてしまわれ、牧師先生との交りというのが第一にありませんでした。

前田教会において何かといえれば榎本先生のところに行き祈つていたゞき教え導いていたゞいたあの幸いな交りはこゝには何もありません。そして又信者同志の交りもありません。私は唯天を仰ぎ「主よ」とお呼びかけするのみでした。宣教師の方が帰つて来られ岩佐牧師は来られなくなり或時は通訳つきの宣教師の方のお話、或時はよその教会の牧師先生、或時は信者さんのメッセージという風でしたからメッセージ自体に恵みを受ける事が困難になつてきました。

その内母がひどく腰を打ち寝たつきりになつたのでよいよ教会出席が間遠になりました。「今日もとうとう礼拝に出なかつた。主よ、一体この教会が与えて下さった教会なのでしようか。もしそうなのでしたら、あゝ、主よ。牧師先生を与えて下さい。よい牧師先生を与えて下さい」私は奥の座敷の障子に向つて座り見えざる方に叫びの様な祈りを致しました。この週の中でしたか或いは次の週か忘れましたが、或日突然沢山の婦人の方が見えられました。「あんまり来て下さらないから、今日はこちらから押しかけましたのよ」と今にして思えば芝原姉とおつしやる今は主に在つて突に力強い頼もしい友になつていて下さる方がおつしや

つた御言葉忘れる事が出来ません。母のベッドをぐるりと取巻き縁側にまで座つて下さつてそこで集會が持たれました。そのとき初めてお目にかゝつた新しい牧師先生「今度この先生が牧會して下さいさる事になり、こちらの事を申し上げますと申上げたら行きませうと申つて下さつたので」と御紹介下さつたのが池田先生とおつしやり今でも母の事を御自分のお母さんの様に御心にかけて祈つて下さる方なのでした。主は祈りに応えたまい牧師先生を与えて下さいました。

しかも非常な熱情に溢れた方で語り進まれるにつれ益々音とろろう壇上から私共一人一人の眠りをさますかの如く、みことばのつるぎは打ちおろされ、迫られ私共は驚嘆の思いを以てその角張つたお顔を見上げ、メッセージに聞き入るのでした。間もなく未だ教会に行かれない母の度に私の家に於て家庭集會が持たれる様になり、先ず池田先生と個人的にお親しくさせていたゞく様になりました。

そして池田先生を通して教会員の方とだんだんお交りが出来る様になりました。

そうなるとお夕拜にも祈禱會にも出席さしていたゞく様になりました。戸畑から八幡に通つて居ります時に比べ私鉄で一駅家から教会まで十五分の距離でございますことは大きな感謝でございます。

私共の参りました当時は外人の方も常に五・六人、主に婦人でございましたが礼拜に出席して居られ又、スバツシャルミニユーヅツクと申しまして素晴らしいメソソプラノの方、又ソプラノの方御二人が交る交る独唱されます。「あゝ、都會の教會だな」と時に自分達がお上りさん然として居り神士淑女の間で肩身のせまいという様な思いをしたこともございました。

受付はアツシヤイ、週報やらいろいろの教會からの便を入れていたゞく會員の一人一人のポツクスをビジョンポツクスといい何かにつけて耳新しく、目新しい事が多うございました。一番始め婦人會に出席していたゞいた時の事を想い出しますが、パーワ先生という女の宣教師の方のお話で丁度詩の様に美しくしかも櫻本先生のメッセージと交りないなつかしいしつくりしたメッセージで（これは要するに御聖靈によるメッセージである故にと思ひますが）すつかり喜しくなり、前田教會にいるときの様なくつろぎを覚えて「どなたかお証しを」とおつしやられたとき、長男敬を抱いたまゝ立上り、自己紹介から始つておしやべりを始めますと初めは驚いた表情が一せいに私をみつめました。私のお話の前田教會に居るときと同じく長々と続きますので、ヒソヒソと何か相談を始められる役員らしい方の御様子。ニコリともなさないパーワ先生。どうも前田教會のときとちがいます。それで私もこれは勝手に短慮うと分り早々に切り上げました。尚二、三の方の短いお証しがありました。

櫻本先生は、やさしく一人一人のお証に対して応答をし折つて下さいましたが、こゝではそれは神様に申し

上げたのだから人間は一切ノータッチという様な冷い無言があるのみでした。

しばらくしてお誘いを受け、このパーワ先生のお宅で持たれている聖書研究会に出席させていたゞきました。敬を乳母車に乗せ、母と三人で、私の家から昭和町の方に歩み進むに連れだんだんと家が大きくなり、立派になり、とうとうたどり着いたパーワ先生のおうちはお城の様な立派な洋館でした。大分気おくれがし、おそるおそること、と思ひドアをノックしますと見覚えのある婦人会の方が案内して下さり、皆さんの中に入っていたゞきました。母は一度で疲れてしまい、その後参りませんでした。私はそれから五・六回は通わせていたゞきました。けれども学びの楽しさを覚える間もなく敬が重荷になり、中絶してしまいました。

ですか。この教会は一寸外にない珍しい教会なんですよ」と半ば不審気にお話し下さった事を記憶致して居ります。その婦人は今私が大変敬愛申上げて居ります。この教会出身で東京杉並の厳格な長老派教会の神学校で先生をしていらつしやる方だったので。田辺先生と云われ、新改訳の聖書の翻訳にも当られ、今は旧約の申命記を受持たれ、忍耐深く最も正しいほん訳を祈りつゝなまつて居られます。

その外にもどちらを見回しても先生のような方ばかり。丁度夏休みに入りましたので、今考えますと、この教会から出ておられる神学生の方々が帰つて来られたのですが、バリバリとした若い学生さんの非常に多い教会と思えました。

その中に何時の間にかエストライク先生とおつしやるこの教会の宣教師の御一家以外の外人の御姿は見えないくなりました。後で知りましたのですが、この教会は福音交友会というミッシンの中にも含まれて居りましたのが、この時分れて独立しましたそうなのです。エストライク先生と八人の執事によつて成る役員会とがこの教会を支え運営し、牧師先生もこの方々が祈り相談し御招へいになるのだ。それで、池田先生もこの例に

洩れず、正式のこの教会の牧師先生ではなかつたので  
す。祈禱会の祈りの問題の中には常に御心にかなり牧  
師を与え給えという課題がのつて居り、その事は全教  
会員のあつい祈りであつたのです。

約二年程、池田先生は祈り勞して下さいました。

その間に私共の家庭集会から救われる婦人あり、教会  
に続々加えられる新しい魂あり、お葬式あり、結婚式  
あり……

私はこの先生によつて、主にお従いす  
る道に於て犯した自分の失敗を明らかに一つ一つ認め  
て主にお詫びし前進する事を学ばしていただきました。  
又愛して下さる主に対して、私共の側のなすべき責任  
と云う事について明らかに考へ行すべき事を教えられ  
ました。考へて見ますと、榎本先生もその点について  
とり分けいつも教えていて下さつた筈なのですけれど、  
私の心が未だ開かれず、私の信仰の段階がまだそこま  
でいつて居らなかつたのでございましょう。

この頃からエストライク先生のして下さつて居る教理  
クラスにお勝いを受け、教会に付属して建てられてい  
る宣教師館の応接間で持たれて居るそのクラスに  
出席させていただく様になりました。或人々は長椅子  
に或人はかたい少し高い椅子に或人は深々と安楽椅子

に或人は座ぶとんをしいてカーベットのの上にと思ひ思  
いの場所でゆつくりとお話を聞ける楽しいクラスでし  
た。丁度パーワ先生の教理クラスがなくなり、そのメ  
ンバーがそのまゝこのクラスになりましたそれで、私  
はやつとその主に在つて愛する姉妹方との交りの中に  
本格的に入れていただきた訳なのです。

エストライク先生による聖書るときあかしは素晴らしい  
ものでした。私は一枚々々みながみをはぐように聖書  
に關して不明りようだつた点、バラバラだつた点が明  
らかになつて来るように思ひました。今まで一年も二  
年もかゝつてやつと通読し、ほとんど分らない点の多  
いこの書、重く不可解なこの書が今や黙示線のみこと  
ばを開いて思うと思つと創世記に飛んで行き、ダニエ  
ル、エゼキエルの予言書を聞いて思うと思つとパウロ  
の書簡四福音書を聞くといふことで、そのみことばが  
啓かれるという形容そのまゝに私の前に真理は素晴し  
く花咲き丁度目もあやな花園にもてなしていただき様  
にこの真理のみふみはそのときあかしによつて私をも  
てなして下さいました。天地のつくり主なる神様の御経  
倫が一つ一つのみことばを通してあざやかに示されま  
した。人類に対し世界に対し創世の始めから、新天新

地のはるか彼方の御計画まで、予言され実現され予言され実現され：：さればそのはるか彼方のまだ実現せられざる予言も必ず実現され得る神の御計画として全く明らかに確実知り且つ信ずる事が出来ました。

又あがなわれた神の子に対する神の御約束、神の子たるもの、目もくらむ素晴らしい身分はエペソ、ピリビ、コロサイの書を旧約と照し合せつゝ、学ぶとき、最早動かざる確信と大いなる感謝と共に私共の魂にきざまれたのでした。

そして共に学んだ後の主にある姉妹方との交りの楽しさ、かつて人との交りを極度にいと嫌った。私に主は除々にこの真の交りの楽しさを教え与えて下さつておられたのです。過ぎ去つた日、前田教会に於て、姉妹方と又兄弟姉妹共々に主のなして下さつたお恵みのお証しを分か合ふことによつて覚えたあの陸み、楽しさをも感謝と共に想い出します。

今までその外観だけ見て近より難い奥様方と思えたその方々も主に在つてまことに愛する好ましい方々と変りました。エストライク先生には云う事の出来ないユ一モラスな点がございます。又御自身ユ一モアを解する方でいられます。

クリスマスマスプレゼントとして一同から皮のジャンパーをお贈りした時一番大きいのを選んでお贈りしましたのに尚小さくその小さいのを何とかしてお召しになるうと努力される御様子。私共は皆抱き合つて笑いこらげ笑つて笑つてもう本当にお腹の底から笑わしていた事だいた事を想い出します。

この学びは又お休暇で帰られる前述の神学校の先生の田辺先生によつて一段と味わいが深められ異つたいろいろで飾られます。

夏の暑い最中もいとわず皆集つて、熱意の溢れる美しいお声によつて語られるメッセージにごくわづかの聖書のみことばからこの様な深い真理がくみとれるとは又この様な素晴らしい展開があるとはと感嘆致します。そして尚明りように深く示し給う神の大み心を心にえりきさましていただくのでした。

主の摂理のお導きにより御教会から離れて九三年。

榎本先生のあたゝかい御理解のもとにこの教会に転会さしていただくいて、会員とさしていただくいた年の四月に神の時充ちて長い長い間の折に込え給ひ岩佐牧師御夫婦をこの教会の牧師先生としてお迎えする事になり又その時に主人は執事に私は婦人会の役員に選ばれ、

もてなしていたゞくばかりでなく今度は御用をさして  
いたゞく者となりました。

その年の秋、私の罪の為おそろしい主との交りの断絶  
の期間を味いましたが、罪の悔改めと共に、ピリビ四  
四一七を秋の特伝の為にお招きした堀内先生と云う方  
が説き明して下さり、神のして下さったお恵みの身分  
を喜ぶ事。先づ喜び感謝する事を教えられ、当時エス  
トライク師から学んで居りましたエペソ、ピリビのみ  
ことばがすべて働いて、私はそのおそろしいところか  
ら私は助け出していたゞきました。

今一たび帰して下さった主との交りの素晴しき主御自身  
の素晴しきにひれふし、且て回心の恵みとお従いする決  
心が主と私とのみの当に先づなされたと同じように、  
この時も献身の促しを主御自身がなさつて下さり、私は  
たゞ主の聖前に私自身をお差し出し申上げたのでした。  
この時から私の一日の主は、主御自身となされました。  
この頃から私の家の倉庫が私の密室となり、かつては  
先づ榎本先生のところへ飛んで参つて御相談申上げた  
者が先づこの密室にとんで入り、私の主に御相談申上  
げられるようになりました。主は御真実に教え導き、なくさ  
め、さとし、力を与え、この密室での主との交りは正

にダビデ王の申されるさけ所、又力、悩める時のいと  
近き助けとなつて下さったのです。

婦人会としても教会としても始めての試みの教理を同  
じりする三教会合同の婦人会の司会を仰せつかり、そ  
の展開のすべてを委せられた時の重荷、苦しさは本当  
に辛いものでした。一ヶ月の間、この密室は主に對す  
る哀訴嘆願、お詫びの場でありました。けれども俄然  
その集会の一日前この密室に於て、主は勝利を給い平  
安を給い確信を給いました。当日、私は五十名に近い  
宣教師、牧師、伝道師その方々のもとにある婦人会の  
有力なメンバーの方々の前で完全に自由で喜びに変え  
て参りました。

主は又美しい声のコンディションをも給い心から、讃  
美する事も出来ました。宣教師の方のメッセージは祝  
され、又全員が喜んで御自分になし給うた、主の御恵  
みを簡単にのべられ或は御名前を述べられ、一人も発  
言なさらない方はなく、それでいて時間が超過する事  
もなく、確かに御聖靈御自身がこの集りを導いて下さ  
つたと思うより他ない集会でございました。その日帰  
宅致してこの密室はどんなに感謝讚美のうづの流れる  
ところでございましたしう。

岩佐牧師のメツセージは回を重ねるにつれて、祝福に  
充たされ力に充たされ、恵みが増し加わり、そして私  
は常にその底に榎本先生のメツセージを聞き味い感じ  
喜びに充されるのです。これはまことに主に忠実なる  
御僕は、共通した通りよき管であられる故としか思わ  
れませんが、それは素晴らしいお働きと、常に主に、感謝  
申上るものでございます。又その奥様はお交り申上る  
につれ味わい深く真実でまことにへり下つた方で常に  
御主人のかけたる所の補いとなされ、主は、まことに  
まことに適切な御方をこのむつかしい教会にお与えに  
なられたと何時も驚嘆に近い感謝をお捧げして居りま  
す。

今は礼拝は、主のいう事の出来ないおもてなし、夕拝  
は楽しい讃美のとき、交りのとき、祈禱会に於て愛す  
る同信の友とり分け婦人会に連なる方々に対する切な  
るおとりなし、教理クラスは心ゆく迄の学び、交りの  
ときとなり、その他特別の教会の行事すべてが私共の  
なすべきたずさわるべき、牽引させていただくべき事  
柄であり、一日、一週間、一月時の流れは主の御命令  
のもとに教会の動きと共に運ばれて参ります。

主は教会に近い高石の地に、私共の永住の地をも与え  
て下さいました。主許し給わば生涯の終りまで、この  
教会と共に、主の御働きに参加させていたゞきて走り  
行かしていただく事を祈り願つております。

この末の世には、反キリストが出て、世を惑わす、私  
共をも惑わすとございます。(ヨハネ、二、十八、  
二十二、ヨハネ、七)事実この通り私共のまわりに  
どんなにいろいろな教会があり信者が居ることござ  
いましょう。私共は全聖書を神よりの御言葉として信  
じお受けし従わんとする数少い群である事を思います。  
長い人類の歴史の中にいつでもこの神の教えを受けつ  
ぐ者の危機がありけれどもその都度神御自身が「残り  
者」を用意され守られ神の正しい教えはこれを受けつ  
ぐ者によつて一筋のはがねの如くその歴史を貫かれて  
来て居ります。

数少い珍しい教会、そこに常に真実なる牧者を通して  
注がれるメツセージは、神のメツセージそのまゝであ  
る故に常に共通なのである事を今一たび思います。

私共、所は異りますが東に西にあつて、この素晴らしい  
教会に集められ導き育て、いたゞく幸いを感謝し、益  
々この末の世にあつて神の召し給う大恩を心に帯し、  
尚忠実に、尚熱心に尚喜こび溢れて主のせよと仰せら



れる事をその器なりになしとげて参ろうではございませんか。

終りになりましたが、これまでに至つたすべては、私が生れ育つた御教会の榎本先生を始め愛する同僚のなつかしい友のさゝげ続けて下さつてゐる篤いとりなしのお祈りのたまものと御感謝申上げるものでございませぬ。

( 信 ず る )

岡 嶋 シヨ子

私は神の恵みを満喫している。朝に夕にそして職場に事毎に感謝しうるこの頃である。それに一つ不思議に思えてならないことがある。これは世界最大の強國をほこつてゐる國のおせつかいである。又國內の為政者の姿である。先づ身近に労働者の弾圧・・市職労働の給与の分断、公務員の給与改訂による侮辱、考えれば考えるほど分らなくなる。

先づ前者は、建國の昔のことを考えてほしい、ヨーロッパの社会で宗教弾圧をうけた清教徒たち百余名は、

自由を求めて新大陸に向つた。そして大陸の一角に新生活の第一歩をふみ出した、先ず手はじめに町造りをはじめた、真先に立てたものが教会であつた。彼らは朝に夕に教会に集つて祈り感謝した。そしてえいえいとして働きつゞけた。広大な自然の開拓これは決してなまやさしいものではなかつた。而し折ることによつて勇氣と力を分けられた、長い苦斗の生活が今日の姿をうみだした。

それなのに・・・彼らは神の教へを忘れたのであろうか。又、後者の問題は一体何のために・・・為政者は労働者のいやがる差別待遇をなせおしつけ様とするのだらう。労働は神聖であり、職場に卑賤はないはずだ。それなのに当然の報しゆを区別しようとしている。又合理化によつて生涯を破かいしようとしている。

だから労働者がおこつて抗議集會を開くのだ。三月下旬五万人の集會が開かれ、今日又七万人の集會を開こうとしている。これは一体誰に抗議しようとするのか、そして何を訴えようとするのかそれは平和と民主主義を破かいする考えの抗議である。平和と民主主義を愛したのはキリストであるシヤカである。この理想実現のためにあらゆる苦斗をつづけられた方々で

ある。その人たちの否神の心を心としてくれたらこの世から斗いはなくなり平等で平和な人間の世界が実現すると信じている。だから苦しみをのりこえて行く勇氣と力を与えて下さいと祈らずにはおれない。私は信んずる世の人々が神をあがめ神に祈り、神に感謝をすると云うけいけんな心で神中心の生活をする様になつたら素晴らしい社会が実現すると。・だから、試験にかつのだ、十字架を背負つて。・弱い者がみんな力を合せて、手をとり合つて前進するのだ。

## 短歌

正野 義雄

○やまなみに夏雲白き湯の里に

聖書よみつゝ一人居む

○竹林の隅に広がる落の葉に

春日を受けて雨ぞ降り過ぐ

○何事も主にゆだねしひととせは

ゆたけく静けし年の暮

悲しみ

伊 規 須 泰 子

○十字架に すがれすがれと 今日も亦

主 よびかけしに 我が歩み如何

○ふと言ひし 偽の言葉に 我が心

苦しみて今日 十字仰げず

さんび



○いざたたえ いざうたわなん 限りなく

神の御業を 仰ぎ見る日に

○山は静 海は動にて 神の御手

かく限りなし 言うべきも知らず

○ことなれる 模様おりなす あさり貝  
夕餉の卓に 神を驚く



祈り

○この群に、神知る人は いくたりかと  
考えみれば 祈らざるを得ず  
○憤りし 人の為にも 祈るなり  
今宵心の 静かなり我



信 頼

○愚かなり されど主イエスの 贖いあり  
おそれず歩まん 光の途を  
○さまざまの 悪しきおとずれ せまり来とも  
聖書業によりて 確く立たなん



幼 な 子

○つぼらなる 隨輝やき 幼な子は  
玩具の山に とびかかりゆく  
○母恋いて 泣くを止めざる 乳児あり  
何かに向いて 我れ惜おる

○赤きくつ 喜び見せし 幼な子は

母早く死にて 父の一人娘

○「園嫌い」と言ひし 登園児の

一言さびし 朝の受け入れ

○一年にも いまだならざる 子を残し

母ふり向かず 勤に走る

○母親を 慕いもせず 砂いぢる

幼な子の背なに 夕陽傾く

生活雑話

加藤みさほ

○「北風よ・起れ・南風よ・きたれ。  
わが園を吹いて、そのかおりを広く散らせ。」

(雅歌 四・十六)

私の母は東北の弾宗明光寺の石田万圃という人の長女として生れ、厳しい教えを受けて、四書五経を読み威張つて居りました。私が齒医者のおさんに導かれて教会へ行き始めたので、母はキリスト教になると一家

が断絶するぞとよくおどしました。牧師さんの訪問を受けても、いつも母が嘘をついて断りました。私は悲しくて、何故このような愛の宗教を毛嫌いするのか、お経が何の役に立つのかと不思議でなりません。反対されればされるほど、キリストを愛する心は強められ燃え上り、集会に欠かさず出席しました。嵐の吹き荒れる寒い夜の祈禱会にも良人がひそかに投げて呉れた首巻きに頭を包み綴と小雨との中を、主のみにて励まされて教会目指してひた走り・ドアにガタンと突きあたり飛び込むと、内では同僧の友五・六人が牧師さんを中心にして祈つて居られました。ああこここそ私の来るべき所だと静かに横に座り祈り始めましたが、言

い表わせない心の喜びに涙が雨の様に膝にふりかゝり三よ三よとキリストイエス様にすがりつき泣いてしまいました。世の迫害があればあるほどますます主を愛する心が深められます。

今私の私は余り何事も苦しみ無く、結構づくめに暮して居ます。僧仰の点からは決して幸福とは言えませんが、やはり抵抗のある方が生き、生きとして来ます。けれども、孫が一寸病氣だとか、入試だとかで苦しんでいるとすぐ痛みを感じて主におすがり致します。

苦しい時の神頼みではいけないことをよく知つてますのに、さあ何かどうとか言うと、まずお祈り、お祈りさえしていたら何でもクシでも、メガネでも、サイフでも失つたものはすぐに出していただけますので祈りてくらして居ります。

夕方近く時間が経つて行くのに敬(孫)の声がありません。「あ、神さま何とぞ敬を守つて下さい。早う帰して下さるように」と祈ります。しばらくして可愛い声が聞こえますから「敬ちやん」と呼んで見ますと「ハイ」と返事がハネ返つて来ます。「神さま・有難うございます」とすぐ感謝します。祈つては感謝し、感謝しては祈りで、一日暮してしまします。誠に祈に応え給う神が他にあるでしょうか。

神様を知らない人達は自分だけが何か出来るように思つて「私達は自分だけが頼りです」という人の心かわかりません。ほんとに気の毒な人達です。私達は救いを受け、神様に愛されているのですから、歯医者

の奥さんの様に嫌われても、断わられても伝道に励みましょう。

○「われらに罪を犯す者を、我らが赦す如く我らの罪を赦し給へ……」(主の祈り)

東京に嫁いだ娘から手紙が来ました。近頃血圧が一〇「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべて  
九〇あつて、目方も一七貫になり御飯も幾ら食べても  
お美味しくてお美味くてとあり、いつ何時ばつたり倒  
れるか知れないとありましたので、私はああ、私の血  
を引いた可哀な娘よと思ひ今あの子が召されても天  
国へは行けまいと思ひ、聖書の聖書を書いたり、罪に  
ついで岩佐先生（浜寺聖書教会牧師）のお説教を書  
いて、何卒田園調布でも吉祥寺でも、武蔵境でも、と  
かく教会を探して行きなさいと勧めました。母は自  
分の娘が信仰の下火になつてゐる悲しみをこめ、また  
何とかして高ぶる血圧も下るようと、心を砕いて祈  
つて書きました。手紙を出したらさあ大変な怒り  
よう。自分達だけ信仰が上昇してゐると思つて説教め  
いたことを言つてよこして、行為がなつてないとい  
悪口・あゝ病気がさせるわざと思つても私は腹が立ち  
もう親子の縁を切ろうと思つて祈つてましたら、夜中  
の二時半頃、主キリスト様に教えられました。

私は娘の手紙を見てから二晩眠られませんでした  
私は憎みました。・・・私は大きな罪を犯しました。  
主に教えられて夜中に筆を執つて手紙を書き始めまし  
た。

台所から美しい歌声が聴こえて参りました。聖歌の  
六百十四までまどわしにおちいらぬよう祈れ（マルコ  
十四ノ三十八）であります。

くつするなかれ、ころみに、くつせば  
ついに積みとならん、すきをねらう敵あ  
ればいよ上げみたまを、

日々祈りもて主に伝いまつれ。  
（折り返し）汝が力なる主のたまを。

今日も午後教会の婦人会に出てまいりました。婦人会  
の会長を仰せ付かつてますので多忙な中にも外出が多  
く婦人の方々を励まし、力付けて走りまわつて居ます  
あの子（千代夫人）には丁度よいお仕事でございます  
ので私は喜んで留守をして居ります。

おぢいちゃんが発言で家拜をつゞけ、又夕拜をもつ  
づけて居ます。朝四時に千代の歌声で目をさまします。  
いつかはさらばと、我が友すべてに

言う時ありとも我心やすし

聖顔を拝して我は告げまつらん

恵に我が身もあがなわれたりと

(聖歌 六百四十番)

聖書を読む度に教えられます。

「あなた方は外側は人に正しく見えるが、内側は

偽善と怒り不法とで一ぱいだ」

(マタイ 二十三章)

私はその通りで、凶星を指され顔が赤くなります。

三十五年の信仰生活にこの様なさまでは御聖霊はさぞ

歎いて御出になつたでしょう。クリスチャンでは無か

つたのですね。クリスチャンとは主にお従いする事を

実行したパウロの啓簡を読んでも、如何にパウロが見

えないものに目を注いで居たかわかりました。二度も

倒れた私が今も神に支えられ生かされて居ります。

去る二月の或る日、五十嵐の父上の記念会をなすべ

く、千代は上京致しました。門まで見送つて表庭に入

り、チューリップの芽を見ましようと一尺程の石垣の

上に登ろうとした時、腰の重いことを忘れて居ました

ので後にドサツと尻もちをついてしまいました。呼吸

が止るかと思つ程の痛さ背骨が砕けたかと思ひました。

神の憐みで石の上でなく草の上でしたがその痛さ、食

慾もなく小便も自由に出ませず四日程は全く苦しみを

した。主の十字架の御苦しみとはくらべものになりま

せんがさうとう苦しゆ御座いました。四日後に千代は

東京から本康実を伴れて帰つて来ました。

(我等に罪を犯す者を・・・に書きました様に私の

憎んでいた娘)その突に色々と下のものの世話になり

夜も寝ないで看護してくれました。あゝ神様のなさる

ことは何も言えないで良心の苛責に胸痛みました。留

典との仲も話してみれば何のこともなく誤解もとけて一

もとの通りになり、土産も持ち切れない程持つてイソ

イソと帰りました。私の血をうけた火の玉のような性

質千代につぶやきましたら叱られました。おぼあちや

んに似ているのだから致し方ありませんよ。私は悲し

かつたがここでもイエス様の愛を一寸離れましたので

祈りました。心は又元の平安に戻りました。

◇御導の中で◇

丸山 恵美子

勝利者なるイエスキリストを信じ、今日も生き給う主に導かれてゐる信仰であれば希望と喜びが常にともなわなければならぬ。．．．とわかつてゐる様でもいざ事にぶつかると事情境遇だけを頼り、或る時は失望すらおぼえる、誠に弱き私でございますが、主は絶えずあらゆる中を通して悟らせ給ひ誠に感謝でございます。我が家は何時も十人前後の大世帯ですが、それに飛入もありますので爽にぎやかな毎日です。私は朝五時に起床、夜休むのも十二時過ぎる事もめづらしくありません。それで出来るだけ時間を見つけては、聖書を学ぶ様にしておりますが、それが仲々うまくゆかず一人静まつてゐると知らぬ間にいつ眠つてしまひます。ですから朝から晩まで用事の瞬間にも、又どこでもたへず讚美し祈ります。

それでも疲れた時はすべてが不可能に見えたり、又愚かな私には今の生活が重荷過ぎるのかも知れないと思つたりして、色々と複雑な気持が交差してどうにもな

らぬ時もあります。そうゆう時主の御前に静まると、主は背負いきれぬ程の荷はあたへられないと教えられます。先日でもそうでした。精神的にも肉体的にも疲れを感じ困りました。日曜礼拝でコリント第一、十三章を学びまして、あゝそうだ私はやつぱり自分自身の事しか考えていない。すべてを自分一人で背負つてゐるみたいな愛のない、エゴイズムな責任感がある事を悟らされ自分の愚かさ、弱さを改めて知り、恥しい思いと共にこうゆう者をなお愛して下さる主の御愛を悟られました。

本当にこの素晴らしい主を知らなかつたらどうして生きていたろうかとおつづく感謝の気持が湧いてまいります。如何なる困難も主の御旨ならば喜んで受けるべきだ、むしろこの様な状態にある私は感謝すべきだと再認識する次第でございます。又サタンにまだわされない様、主の尊い御言葉尊い愛の灯を見失わない様に力と勇氣をあたへられます様今日も祈つております。

〔勝利の道〕

岡嶋 ミヨ子

主をあがめ、主に堅く立つて歩く道。それは誰が何と冒つても、びくともしない道。

世のわずらいも悲しみも、主のみ目がどこにあるかを想うときじつと祈らずにはおれない。

夜もすがら、そしてひねもす祈りながらじつと堪えしのび、み名を讃美しながら歩いて行くことができる幸いな道、たとえそれが世の人の目にもじめに見え様とへつちやらほいだ。

十字架を背負つて歩く道は苦しみがない。

神と共に居ることは最高のよろこびである。とジョソウエスレーは言つたとか。まさにその通りである。

神と共に居れば御霊が働いて様々の呪いをといて下さる。誰でも知つている様に人生航路には山もあれば川もある。厚い壁にぶつかることもある。これらの障害を敢然と乗り越える力を与えて下さるのが神である。

この事を身をもつて体験したこのごろの私である。アクマの様に立ちふさがつた壁。どうにもならなかつた壁が、ぐいぐい破られて、私を安全な道に導いて下さつた神さま。

万軍の主よ、どうか私を助けて下さいと、子どもの様にすがりついた。より頼む者の幸いがひしひしと身に

感じられる。

「あなた方はこの世では悩みがある。然し勇気を出しなさい。私はすでに世に勝つている。」

(ヨハネ十六・三三)

まさにこの通りだ。悩みの中に首を突込んでほならぬ。目を主に向け勇気を出し、胸をはつて勝利の道を歩くべきである。これが主のみ旨にかのう唯一の道であり勝利の道であると思う。

「信ずる者は幸いなり」

神の救いを信じ前進又前進、主の御足跡を慕い、一歩一歩前進できる私は何と幸いなことであろう。感謝で一ぱいだ。この前の日曜日夕方、孫娘三人をつれて学校に行つた。そして校長室や、玄関そして廊下にとりの花を飾つた。白百合の花とピンクのカーネーションそしてバツクにニューサイラン、いつべんに校長室が明るくなつた。・・・その翌日北九州市の人事管理主事さんが初めて学校に来られた、全く不思議だ。こんなお客様が見え様とは夢にも知らなかつた、私に花を飾らせて下さつた神さま。みたまの働きだナ。とつくづく感じ一人感謝した。

そして事毎にすばらしい救いの手をさしのべて下さる



神様、ほんとにありがとう。だから私はあなたから離れられない。母の乳房にすがるみどり児の襟に、信頼と感謝の念で一ばいだ。

「神よ私をお守り下さい。私はあなたによりたのみます」 (詩篇十六・一)

讚美歌を声高らかに歌い乍ら主の道を歩く私は幸いである。

み霊よ降りて昔のごとく

くすしきみ業を現わしたまえ

代々に居ますみたまの神よ

今しもこの身にみちさせ給え アーメン

(昭和四十・六・八 日記より)

ゆるし



正野員子

五月十一日の夕方の出来事である。

流し台の汚れ物を洗っていると、突然「ガチャン」  
ガラガラツ」と

表硝子の割れる大きな音に思わず濡れた手のまゝ表へ

飛び出した。何度も被害を受けているからである。逃げ行く車の番号を目で追つて見たが、たしかめることは出来なかつた。

やり切れぬ思いで家に入ろうとした時、単車がうちの前に止つた。

「やつぱり破れとるね、すみません  
すぐ入れますから」

「そうですか、それはすみません」

私は丁寧におじぎをした。四十才くらいの頑丈そうな労働者風の男であつた。車にまたがつて掃えろうとしたので、住所と氏名を聞くことをわすれなかつた。

世の中には正直者もいるものだ。私はほのぼのとした気持で家の中に入つたトタン

「アツ」と声を上げた。

表ガラスだけではなかつた。単車をはねた小石は表ガラスを突抜けて大陳列の鏡板を割つているのである。

急ぎ外に出て

「モシモシー モシモシー」

金切り声を張りあげて叫んだ。男の人は振り返つて変な顔しながら引返した。

「これを一寸見て下さい」

私は男の人を家の中に招じ、こわれた陳列を指さした男の人は損替莫大と思つたのか、見る見る顔面蒼白になつた。しばらく沈黙が続いたが、

「ごりやひどい、奥さん半々にしまつしよや」と言つた。

私は氣の毒にも思つたが、どうもスジの通らぬ事に思えてならない。

「半々なんておつしやるのは無理ですよ。あなたが石をよけさえすればこんなことにならなくてすんだのでしよう」

納得がゆかないので思つたまま主張した。

所がますます変なことを言い出した。

「奥さん、そんなことすいこと言うもんじやない。

今時逃げる人が多いのに、俺のような正直者がどこにおるな、ひき返さんじやつたら、あんたが皆かぶらんならんとばい、それを半分俺が持とうと言うとするに」これでもわからんかと言うような口ぶりである。何だか私が悪いことしたように思えてくる。いやいやそんな事はない。私の言い分が正しい。自分から正直者と言う人に限つて正直者のおつたためしがない。もしかしたら私が追かけた時、車台番号を見られたと思つ

て、訴えられることを恐れて引返したに違いない。そんな意地悪な考えも浮んだ。

（負けてなるものか）心の中で自分を励げましていた。あなたのおつしやること、おかしいと思いませんか。割つた人が弁償するのは当り前の事ではないでしょうか。とにかくこゝで言い合つても仕方がないから、警察の方に聞いてもらいませんか。」

これなら先方も納得ゆくだろうし、私もたとえ不利な発言をなさつたとしても警察の言う通りにしようと思つた。

所が警察と聞いて、おぢけたのか

「払いますよ払いますよ、払つたらいいぢやろう」

「元通りにして下されば何も言うことありません。

それではお願いします。」

ということになつて別れた。私はその言葉を借じて何日も待つたが、何の音沙汰もない。

表ガラスだけ用心のためすぐ硝子屋に頼み支払つた。

お金の領収証は大切に取つておいた。

支払う誠意がないように思われたので、こんな場合どうしたらよいか隣の関門急行の所長さんにお尋ねした所長さんはこうおつしやた。「そんな横着な奴は警察

に頼んで、こらしめてやりなさい」とおつしやつた。  
早速派出所に出かけて行つた。

警察という所は、いつそ関係のない所でもなかつた。  
父が材木商をしていたので長大物許可証もらいに何度  
も行つて、或る時はひやかされた思出もある。だから  
別に固くともならなかつた。たゞ通行人がチラリとこ  
ちらを見られると、余り居り心持のよい所でもなかつ  
た。

派出所にはたつた一人腰かけていられた。

相当年配の方で、落ち着いた低い声と濃厚な態度は好  
感をもてた。この道で相当苦勞なさつたであらう。ひ  
たいのしわが物語つているように思われた。

「何のご用ですか。住所氏名は？」

型通りの尋ね方である。日誌であらうか部厚い帳面に  
何か書いていられる。

私はいままでのいきさつを、ありのまま申上げた。

私が語り終えるまで、静かに聞いておられたが「破害  
受けた時来ればよかつたのに、その時の立会人がおり  
ますか」とおつしやつた。

「立会人ですか」

予期しない言ばでとまどつた。

「証人のことですか」

「証人ですか、そんな人おりません。しかし本人が認  
めておるのですから……」

「所がね、自分で認めておきながら、証人がないと第  
三者はわからないのだから、否定するとなると事が面  
倒になる。そんな時は誰れでもよいから立会人を立て  
置くことだね」

成程、そんな悪い人でなければよいが、何か不安にな  
つてきた。そこでお願いした。

「わたしが請求するより、あなたから言つていたゞく  
方が効果があると思うのですが……」

「それがそうはゆかんですたい」

「どうしてですか」

「戦前までそういう取立てまでやつとつたんだがね  
戦後道徳感がうすれて成功したためしがない。却つて  
さかねじくわせられるようになって、それに人手不足  
のためそういうことは家庭裁判所に持つて行くようになつ  
つとるのでね」氣の毒そうにおつしやつた。

「それでは全然駄目ですか」

「そういうことですか、戦後警察の威力も地におち  
て、あなたの意に副うことも出来んで不服ぢやろうけ

ど・・・」

仕方がないと言うのであろう。腰にある刀剣も泣いて  
いるように思われた。

「それでは何ですか警察の仕事は泥棒つかまえること  
交通取締りが専門ですか」

私たちにとつては警察という所は何の役にもたゝない  
存在が不服でたまらなかつた。

私の言い方がよほどお笑しかつたのか、顔を天井に向  
けて、カツカツと大笑された。

私はちつともおかしくも面白くもなかつた。

「あなたの言いなざる通りですたい。一口に言えば犯  
罪を取締る所、つまり暴力に対してはどこまでもあな  
たを守り、あなたの味方になつて上げるが、今のあな  
の場合、犯罪とは認められんから、示談に持つて行く  
ほか仕方がないでしょう。それで解決出来ぬ時は家庭  
裁判に訴えなさい」親切丁寧に教えて下さつた。

もうこれ以上居る必要もないので、

「どうもお忙しい所いろいろ有難うございました。

私は感謝しながらすこすこ帰えつた。

(もしかしたら案外よい人かも知れない)

一 ー ーの希望をもつて丁寧に手紙を書いて、速達で送

つた。はや事件から一週間経つていた。

翌々日、本人ではなくて代人が私の家に来られた。

仲裁に来られたのだろうと思つた。本人が三菱化成に

出ている人であれば弁済も大変であろう。この人の言

う事聞いて上げようと同情した。善意をもつてその人

に應對した。ところが、さにあらず

「実は〇〇さんに頼まれて来ました。私は事情は知り

ませんが、これだけ暫つてもらえばよいと言われてき

ました」切口上である。

「どういうことですか」

「あのー、そのー」何だか言にくそうです。遠慮せ 26

ずとも、大ていのかことは聞いてあげるのにと思いつつ

次の言葉をおそしと待つた。

「あのですね」思い切つた調子で言つた。

「実は自分の車が小石をはねたと思つたが、よく考え

てみると、自分の車ではなく、後からきた車だという

ことです。」

一 ー ーに言つてしまふとホツとしたようすで、もう帰え

ろうと浮き足立つているのである。

「まあ、ほんとにそんなことおつしやんたんですか、

あの人石をはねた時私はすぐ追つたのですよ、後か

らは何にも来ませんでした。」

「……」

「何も関係のないあなたをよごす事自体がおかしいとお思ひになりませんか？」

ほんとにそう信じている人なら自分が来たらよいでしょう。そんな見えすいた嘘おつしやつて支払わないつもりでしょうけど、こちらにも考えがありますとそう言つて下さい。」

先方の偽り言葉を決して許すまい。又許してはならないと思ひ、そのためにどんな費用がかゝろうとも戦おうと思つた。

「あのーお気毒ですが、警察では取扱わないそうです。すでにそういうことを調査の上で計画的行為であることは明白である。」

「そのために裁判所というものがちやんとあります。そちらがごめんなさいと言つて来たのであれば或いは許して上げたかも知れないけどもう一銭もまけません。帰えられたら、そうおつしやつて下さい。」これ以上言う必要はなかつた。それで「ごくろうさま」と言つて別れた。

所がその人が帰つた後がいけなかつた。

ムラムラと怒りがこみ上げてどうしようもない。と誓うて訴える程の金額でもなし、さりとて許してもおけない所長さんがおつしやつたように、こらしめてやりたい。然し裁判するにはわづらわしいし、忘れられたらどんなによいだろうと思えど却つてあの男の顔が目につぶ。こちらを見て、ニタリニタリ笑つている。

「お前が愆なことを言うから、ざまあ見ろ」

そういつているようではがゆい怒りは燃え上り胸の動悸は高鳴る。何としてもいやな思ひ、押しつぶされそう、くやし涙か、自分のいやしい心を悲しむ涙か、泣けて泣けてしかたがない。お前はそれでも信仰者か、もつと信仰者らしく振舞つたらどうか。そんなこと言つたつて、これが腹立てずにおれようか、私がサムソンのように強かつたら投げ飛ばしてやりたい。

(そうだそうだ信仰信仰というけど信仰したつて何の役にも立たんのだよ)

(あつ、悪魔だ、悪魔が瓜を磨いているぞわが心よ、しつかりせよ、お前にはサタンよりもつともつと強い方がついでにいるぞ)

至極早く来て下さい。悪魔を追い出して下さい。

そして私の心を静めて下さい。

にくらしくて許せません。私は許して上げたいのです。許せたら平安があると思うのです。けどはがゆくてとても許せません心の黒潮がうづ巻き荒れ狂うています。苦しいです。助けて下さい。

あなたは嵐の海に向つて「静まれ」とおつしやた時一言で波静かになりました。今その平安がほしいです。

私に何の力もないことがわかりました。弱い私をあわれんで下さい。今みことばを下さるなら命がけて守ります、どんなことでも致します。あなたはいつも私の願いを聞いて下さいました。あの時もそうでした。この時も・・・主の恵みを教えている時でした。静かな細き声があつた。

「上着を取ろうとする者には下着も与えなさい」

上着／ 上着／ そうだ／

主よあなたの上着は役人共が暴力をもつてはぎ取り、くじ引きして自分のものになりました。

それでもあなたは取り返そうともなさらず黙々となすがまゝに裸の恥を群衆の目の前にさらけなさいました。上着のみかご自身おさえ捧げなさいました。ののしられてののしり返さず、苦しめられて激しき言をいただきました。

ずあゝそれなのに・・・それなのにわずか一枚のガラスのために私は愚か者でした。ごめんなさいごめんなさい。悔いの涙があふれ流れた。

「ぎつねには穴があり空の鳥には巢がある、しかし人の子には枕する所がない」(ルカ九・五八)

三十三年の間生涯一点の罪なき神のお一人子が私たちと同じ試験を受け、人々からは冷たい目で見られました。それでも多くの苦しめる人悲しみ人には喜びを又盲の目を開け啞は物言ひ、らい病人さえきよめられ日夜休みなく町々村々をめぐりて真理を説かれ助けられたみ手と、おみ足は心なき者のため無惨にも釘でもつて打ち込まれ、強盗殺人者と同罪に十字架にかゝられました。頭にはいぼらの冠をかぶせられ、悪口ざん言、罵倒、にくしみの中で、血汐を流され、その間苦痛はいかばかりだつたでしょう。

「彼らを許し給え、そのなすところを知らざるためなり」憎むべき敵のために祈られました。何たる崇高な御愛でしょう。

あなたのご愛は、はかり知ることができません。人から捨てられたのみか父なる神からも捨てられ給いました。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給うや」

血の叫びをなさいました。

三よ／＼ ごめんなさい。申しわけありません。それは私かのろわれ、拾られるべきでした。その十字架は私がかかるべきものでした。今まで犯した罪を、皆さばかれるならば、私は死ぬほかありません。罪のかたまりのような私を徹底に許すために私の身代りとなつて死んで下さいました。

許されし身の大恩を忘れて人のあやまちを許さず裁きにくんでいました。

私は何という愚か者でしよう。

ごめんなさい。お許し下さい。

私は悔の涙と共にひれ伏し祈つた。

その時全き平安とはこういうものでしょうか。荒海ののように荒れ狂つていたにくしみも、あとかたもなく消え去り、不思議に変えられた自分を見たのでした。自分の努力で許そう許したいと願つて出来なかつた許しが、み盛様のお力によつて助けられ一瞬のうちに私を変えて下さつたのです。

「上層を取らうとする者に、下層おも与えなさい」  
みことばは偉大な力があり、生きて今も働き給う

主のみ力を知ることができました。

あゝ人を許すことは何とすばらしいことでしょう。受くるより与える方が幸だという境地がわかるような気がします。

私はあの男の人が可哀想でたまらなくなつた。私がつかり許して上げているのも知らずうちの前通るたび心さゝれ苦しんでいるのではないでしようか。

「主よどうぞあの人の罪も許して上げて下さい。そしてあなたの福音にあづかりますように」と祈つた。

勝利／＼

勝利／＼ 有難うございます。

平安／＼ 怒り憎しみから解き放たれたこのよろこ

び、この平和

こころの緒琴に

みうたのかよえば

しらべに合わせて

いざほめうたわん

あゝ平和よ

くしき平和よ

み神のたまえる

くしき平和よ

讚美は口を突いていで五三一番を両手を上げてりたつ  
ていた。

昭和四十一年 六月八日記

詩「スリッパさん」

正野 員子

名前のはいつたスリッパ

その名のあるじは、今はいない

それなのに礼拝の日は、いつも

きちんと両足そろえて

ぬしを待っているようだ

或る信者が

そのスリッパに手をおいて祈った。

「早く帰えつて来ますように」

あなたの心をさつしてか

或る日持ち主に出会ったので

スリッパさんがあなたを待っているよ

といつたら

すつかりわすれていた

けど持ち帰えるほどのものでなし・・・  
名前が残つていやだから

仕末しとつて・・・と

頼まれてしまったの

可哀想な可哀想なスリッパさん

わたしは ふびんでたまらない

何にも言わないから

よけいたまらないの

この前あんまりかわいそうだから

そつと、はいて

あなたの表情をうかがつたの

そつと耳に手をあて、ね

そしたら驚いたの

あなたは決して

嘆げいたりなんかしてなかつたのですね

わたしはお馬鹿さんでした

感傷的で泣いたりして

だけどあなたは立派だと思うわ

人の目につかぬ所で

人の足を守つて

ふまれても拾られても



だまつて黙々と使命に生き  
古びれて色もあせたけど

誰れにでも真実で

誰れにでも愛され

みえもはらず

誰れからも ありがとうと

言われず 主の日まで

キリストに生きることを

生きがいとして・・・

あなたのさゝやき

よく聞えたわ 私も

あなたのようにになりたい

スリツバさん ありがとう。

愚かなれども

伊規須 泰子

或夜のこと、私は私の心と対座して、信仰のことに  
ついて、聞いただしてみました。

「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を

呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ない  
のに、なおも望みつつ信じた。・・・

彼は神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせ  
ず、かえつて信仰によつて強められ、栄光を神に帰  
し、神はその約束されたたとを、また成就すること  
ができると確信した。」(ローマ人への手紙四章)

この信仰をもてるかと。  
つまるところ、神の全能を信じているかと。

そうでした。

今迄他人には大言してきました。日曜学校の子供には  
声を張り上げて、伝えました。

でも、・・・でも、・・・心にくいくい詰めよつた  
とき、心は「然り」と申してくれませんか。

心はうなだれて、告白しました。  
その信仰をどうしても持つことが出来ないのだと。

気がつきませんでした。

今更神は神である。と疑うことは出来ず、愚かな私の  
為、十字架上に血を流して贖なつて下さつたイエス様  
を、今はあまりに当り前に受け入れて、その恵の中に

ゆつたりと、ひたり切つていました。

しかし、私の祈りの中の一つについてふりかえつてみますと、

「他人の為に祈るときは信仰が持てるのですが、我身になると、どうも……あまり自分をみつめすぎているからでしょうか。」

或時は信仰をもつて切に祈りました。

或時は絶望しました。

又或時は聖言によつて望を抱きました。

或時はすべてを主にまかせました。

しかし又、願いの如くならない事に焦りを感じました。

そして現在、祈り求めているのに、この事について、とことんの心の底では神を信じていない状態に気がつきました。

他の事はともかく、この事ばかりは、……と、状態を見て、神の力をかぎつています。

望なき状態を示された時、なお望むのが信仰です。口では言えます。頭では理解出来ます。でも心はやつかいなもので、どうも信じる事が出来ない様です。心と口や頭が、一致していない自分である。と気づく事

は悲しい事です。

信仰の苦しみは、願いの如くならないことよりは、祈つてまかせきれない事です。

こういう事実の前に、もう頭も上げ得ず息苦しくなる程でした。

しかしこの時、十字架が迫つてきました。

こんな心しか持つことが出来ない。

弱い

愚かな

不信仰な

汚れた 私でも

神は愛して下さると仰言るのです。

この事丈は、打ち消せない確信があります。

心にこうしると、命令しても、どうにもなりません。

私の心を動かす事の出来るのは

私でなく聖霊でした。

気がついたとき、うなだれていた心も、明かるさを取りもどしていました。

声が聞こえます。心の状態を知つても、

それをみつめず

十字架をみつめなさいと。

## 料理雑感

伊規須 泰子

落着いて作る暇もないくせに、何か楽しくて、うれ

しくて、お料理を習っているのです。一ヶ月わずか二回です。けれども日本料理、西洋料理、中華料理、お菓子と、少しづつ少しづつかじつていつていつています。

走つて行つて、息つく間なくお習いつていつています。すが、それはほんとうに心暖まる時間です。何故つて教会で行なわれるからでしょうか。主にあるお交りだからでしょうか。

「生きたえびですよ」。と説明されれば、その形に色に、動きに神を讚美致します。すぎとおるようなないかがピクリと動いていれば、背い海の中をロケットみたいに泳ぎ廻る姿を想像します。朴訥な馬令著に、劇軽な人參に、チャイミングな玉葱に、おすましの青葱に、その都度新しい驚きを感じ、童話の世界には入つていく様な心のおどりを覚えます。

包丁を入れるのが可愛そうだな、おいしいなと感じるのも束の間、今度はそれが変つた形に色になり、すば

らしい御馳走が出来ていくのがまたまた驚きです。

あの表現ににくい半透明のえびが串にさされてゆがかれると、見事なみかん色になるし、あの馬令著をゆでて裏返しすると柔かいクリーム状になるといつた具合。

実の所お料理の間中、心の中は「フーン」「ヘー」と感歎の連発なのです。

先日シュークリーム・エクレアを作つた時が、又すばらしいものでした。

卵、粉、バター、牛乳を混ぜ合せたもの……もちろん混ぜ方はむつかしく奥義があるようですが……ただそれ丈なのにポトンと天板に落した直経五厘位の塊が天火の中でふくれ上り、見事あの食欲をそそるシューという外かくなつています。ねり加減、火かげんと細心の注意、熟達は必要ですけれど、思わずお祈りした結果すばらしいものが出来ました。もちろん私の腕ではありません。同じ手なのに、手品の様につくり出す太田先生の手になつたものですが、楽しさを通り越して不思議になつてしまいました。ばこんばこんとした盛り上りの感じ、中はクリームをつめるべからんどうになつています。手で形づくろうたつてどう

てい出来ない変化ある面白さ。時々天火の中をのぞく  
たび、ふくれ、色づいて、いつている。

天国はパン種のようなものである。(マタイ・  
十三・三十三) ふくれ方を見ている間、天国の例え

を思い出しました。神様が人間の為に与えて下さった  
材料でこんな手品みたいなことが出来る。神様のパン  
種が入っているのでしょうか。しばし見ほれた時間  
でした。

といった具合でも楽しいお料理の勉強です。

あのお料理もお料理も作り方を知っている。

いざというときにはつくれるのだ、という事だけで心  
豊かになります。ましてつくつて食卓に供したら、家  
族の者も自分もどんなにおいしく楽しいことでしょう  
か。

み冒だつて読んでたくわえて心悅びます。

実行して味合つたら、なおのこと心おどると思えます。

### 求道者への書簡



高木敏夫

尊い御名を讚美いたします。

なつかしいお便りをいただきました。とても嬉しく  
感謝いたしました。その後、どうしていらつしやるか  
と心の中でいつも案じておりましたが、こうして又、  
お交わりができるようになりましたことを、大変よろ  
こんでおります。

お手紙によりますと、毎日の生活のすべてを、神さ  
まにおゆだねして、感謝と平安のうちに日を過ごして  
いらつしやる御様子、何よりのこととお喜び申上げま  
す。

私も、神さまの恵みとあわれみによりまして、毎日  
を、全き平安のうちに御従いさせていただいておりま  
すからどうぞ御安心下さい。

健康の方も守られて元気でおります。「主はあなた  
のすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をや  
す。」詩篇一〇三篇三節、(旧約聖書八三八頁)とあ  
る通りです。

さて、お手紙によりますと、お祈りがまだお出来に  
ならない御様子ですね、おたずねに従つて分から、お  
祈りについて、私の体験をお知らせいたします。

私が、神さまの導きによりまして、現在属している

前田教会に出席し始めて間もなく、牧師先生のおつしやるには、「お祈りする事と、聖書よむ事、この二つは、あなたの信仰の成長に一番大切なものです。この二つをしつかり守つて行くなら、必ず果を結びます。」と言われました。そして、「お祈りする事は、呼吸するのと同じで、聖書よむ事は、食事するのと同じです。よ。」と言われました。私共に取つて呼吸しないことは死を意味します。又食事を取らねば栄養失調になつて、倒れてしまいます。それと同じように、私共がこの二つのことをおろそかにしたら、いつのまにか、信仰的栄養失調をきたし、遂には、死をまねくことになります。

新約聖書、テサロニケ人への手紙、第五章十六、十七、十八節（三二三頁）に、「いつもよろこんでいなさい。絶えずお祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」とあります。

あなたは、いつもよろこび、又すべてのことについて感謝していらつしやいますが、「たえず祈りなさい。」という神さまのすすめにはまだ従つていないという事になります。

それでは、お祈りはどうして始めるかという事にな

つてきます。私も、始めのうち、先生から「お祈りしなさい」といわれても仲々口に出ませんでした。「神さまは心の中までご存じだから声に出さなくても心の道に祈ればきいて下さるだろう。」とか、「心だに誠の道にかないなば、祈らずとも神は守らん。」と古歌にあるように神さまの前に恥ぢない生活をしていれば、神さまは必らず恵んで下さるであろうとか、自分で勝手な理屈をつけて口に出してお祈りしようしませんでした。そんな時先生は、「お祈りとは、親子の会話と一緒にです。子供は、何でも親に申上げるでしょう。」と言われました。その通りであります。お祈りは親子の交わりの時です。「お祈り」に形式はありません。必らずしも正座して、目をつぶり、手を合わすこともありません。（出来得ればそうすること）又、どこにいてもお祈り（交わり）ができます。新約、ヨハネ福音書の十四章十四節（一六五頁）には、「何事でも私の名によつて願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。」とあります。私共が、神さまに対する願いや感謝をそのまま口に言い表わせばいいのです。但し、最後に、「イエスさまのみ名によつてお願いしなさい。」という事は必らずつけるべきです。私共は、

以前神さまの前に罪人であつたものです。それを、イエスキリストが私共の罪を一身に引受けて、十字架の上にのろわれて下さいました。そして血を流しつくして、

私共のあがないとなつて下さいました。それ故に今、

私共信ずる者は罪を赦されて、神さまの子供となるこ

とができました。だから、祈りがきかれるのも、イエ

スキさまの故です。恵みを受ける事が出来るのも、イエ

スキさまの故であります。十三節に、「わたしのみ名に

よつて願うことは、なんでもかなえてあげよう。」と

約束です。神さまは約束を必ず実行なさいます。聖

書に、「どうしなさい、そうしたらこうしてあげよう

。」というよりの約束が沢山あります。その約束に従

つて、私共が、祈つていくなら、約束に従つて神さま

はそれを成就して下さいます。又、神さまから祈りを

きいていただくためには、私共の方で、「必ず与え

られる、その通りになる。」という信仰が必要である

ことを聖書はいたる所に示してあります。一例を申上

げますと、新約マルコ福音書、十一章二三、二四節、

を見て下さい。七一頁です。「その言つた事は必ず

成ると、心に疑わないうで信じるなら、その通りになる

であろう。そこであなたがたに言うが、なんでも祈り

たが、結局、「習うより、慣れる。」と、諺にありま

す。求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そ

うすれば、そのとおりになるであろう。」とあります。

ここに、「あろう。」とありますが、神さまの言葉に

しては、断定的でないような気がするかも知れません。

でもこの点、最近出版されました、「新改訳聖書」の

方、はつきりしています。引用しましょう。さつき

のマルコ十一の二三より「ただ、自分の言つたとお

りになると信じるなら、そのとおりにあります。だか

ら、あなたがたに言うのです。祈つて求めるものは何

でも、すでに受けたと信じなさい。そうすればそのと

りになります。」これでしらはつきりしております。36

又、お祈りは願ひごとばかりでなく、感謝も申上ぐべ

きです。新約、ピリピ人への手紙の四章六・七節(三

一頁)「何事も思い煩つてはならない。ただ、事々

に、感謝をもつて祈りと願ひとをささげ、あなたがた

の求むるところを神に申上げるがよい。そうすれば、

人知ではとうてい測り知ることの出来ない神の平安が

あなたを覆ふ心と思ひとを、キリスト・イエスにあつ

て守るであろう。(守つてくれます。)」とあります。

今迄いろいろと、聖書のみ言葉を引用して説明しまし

たが、結局、「習うより、慣れる。」と、諺にありま

すように、口に出して祈る事が先決問題であります。旧約、イザヤ書四一章十節（九九九頁）「恐れてはな私の先生は、「お祈りが出来ないなら、お祈りが出来ない。わたしはあなたと共にいる。驚いてはならぬようにして下さいと、まずその事からお祈りしなさい、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強い。」と教えて下さいました。それから私も折り出し、くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもつて、あ三ヶ月程たつた時には、道を歩きながらも電車に乗つたを支える。」私共はこの神さまによつて大安心でている時も、仕事をしている時にもお祈りするようにあります。最後にもう一つつけ加えさせていただきます。それは始めに申し上げました、聖書に親しむという事です。祈りが習慣となりば祈り即生活というよ

そしてたのしみになりました。「絶えず祈りなさい」という聖書のとおりになりました。こうして祈つている内に、今まで悩みと不安と劣等感に充ちた私の心が段々明るくなり、悩みは喜びに、不安は平安へと変えられ、何の力もなかつたものが、神よりの力を与えられました。五ヶ月頃には、すっかり変つた自分を発見いたしました。祈りの力とは実に不思議です。讚美歌「三番に、「げに奇しきかな、いのりの力や、祈りにまされるものなし。」とある通りであります。新約、ペテロ第一の手紙、二章の二節（三六七頁）に「今生れたばかりの乳呑み子のように、混じりけのない盞の乳を慕い求めなさい。それによつておい育ち、救いに入るようになるためである。」とかいてあります。お忙しい毎日とは思いますが、聖書を日に一章づつでもお読み下さい、そして、重要と思われる所に赤線を引いて下さい。そして、聖句を一つでも多く暗記するように心掛けて下さい。聖書の言葉は、私共人生の羅針盤となつて私共を正しく導いてくれます。旧約詩篇、一一九番の一〇五節（八五九頁）に、「あなたのみ言葉は、わが足のともしび、わが道の光です。」とある通りです。

私共の信ずる神さまは、全能者です。このお方が働らき給うとき、私共の性格も性情も、又、病氣をも全く新しくなし給います。この神さまが、私共に側近くいて下さいますから私共の生涯は勝利です。幸です。今までのいろいろとかきましたが、あまり沢山一緒に

かいたら、かえつて分らなくなるかも知れません。今日はこれ位にしておきます。今後、信仰上のどんな小さな事でもいいですから、疑問に思う事、理解出来ない事など起りましたら御遠慮なくおたずね下さい。私の理解の範囲内でお答えいたします。

最後に私は、あなたがお祈りが出来るようになるため、又、神さまの御愛と福音の真理が尚一層理解されるようにいつも覚えてお祈りいたします。又、あなたと御主人の御病気のためにお祈りさせていただきます。では御一家の上に神さまよりの豊かな祝福あらん事をお祈りいたしましてお別れいたします。

主に在つて愛する

長谷川様え

高木 敏 夫



編集後記

昨年に続いて「ぶどうの木」第二号をこゝに発行することができて感謝です。

今回は前田教会のことをお忘れにならず、遠く堺市の加藤両姉、大阪の丸山姉より御投稿をいただきました。心をつくして主に従つておられる御様子や、恵まれたお証を伺うことができて本当に感謝しています。

校正について、今回はできるだけ気をつけたつもりですが、前号では至らなくて誤字が多く読みづらかつたことをお詫び致します。

なお、編集などについて御意見、御批判などありましたら、どしどし出して下さい。そして皆さんでこの「ぶどうの木」を育て、ゆきたいと思っております。

昭和四十一年七月二十日

昭和41年8月4日印刷

昭和41年8月6日発行

発行 八幡前田教会

編集 正野真宏

印刷所 有限会社よしみ孔版社